様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年　６月２２日現在

研究種目：基盤研究（B）
研究期間：2005～2008
課題番号：１７３２０１４０
研究課題名（和文）　民俗画像資料の情報化と研究活用に関する研究

研究課題名（英文）　Data processing of Folk-Visual-Documents and Study on Research method

研究代表者
小川　直之（OGAWA NAOYUKI）
國學院大學・文学部・教授
研究者番号：３０２６５９５４

研究成果の概要：國學院大學折口博士記念古代研究所に所蔵されている大正 10 年～昭和 28 年の折口信夫博士撮影などによる、また昭和 26 年～昭和 62 年の坪井洋文博士撮影による日本の民俗画像のデジタル化とデータベース化を行い、研究資料として活用するための情報化を進展させ、さらにこれらの民俗画像について沖縄県・鹿児島県・佐賀県・岡山県・新潟県・東京都で現地調査を行い、地域変貌を叙述する民俗誌作成上の有効性を明らかにした。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００５年度	3,300,000	0	3,300,000
２００６年度	3,900,000	0	3,900,000
２００７年度	3,100,000	930,000	4,030,000
２００８年度	3,000,000	900,000	3,900,000
年度			
総　計	13,300,000	1,830,000	15,130,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文化人類学　・　文化人類学・民俗学
キーワード：民俗学、民俗画像資料、民俗写真、民俗誌、折口信夫、坪井洋文、画像資料データベース、折口博士記念古代研究所

１．研究開始当初の背景

研究開始当初の本研究課題をめぐる研究動向や準備状況は次の通りである。

（１）1990 年代末から、たとえば国立歴史民俗博物館の「民俗学的画像に関する基礎的研究」、國學院大學の学術フロンティア事業「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」、神奈川大学 21 世紀 COE プログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」など、画像資料に関する大型共同研究が行われ、また、1999 年から写真資料の重要文化財指定が行われるなど、写真を中心とした画像資料に関する学術的な関心が高まっていた。

（２）國學院大學折口博士記念古代研究所には、折口信夫博士による大正 10 年から昭和 28 年にわたる約 2700 点の、坪井洋文博士による昭和 26 年から昭和 62 年にわたる約 36000 点の民俗写真が所蔵されており、これらについて学術情報化（デジタル化とデータベース化）と現地調査を行うことで、人文学分野における画像資料研究の進展に寄与することを意図した。

（３）本研究課題を行う以前に、2002～2004 年度・基盤研究(B)「日本近代と折口民俗学形

成過程の研究」（研究代表者・小川直之）で、折口信夫関連の写真資料のデジタル化等を進めていた。また、2003 年度には國學院大學文学部共同研究費「坪井洋文民俗研究資料に関する研究」（研究代表者・小川直之）で、坪井博士撮影の民俗写真の整理を行っており、これらを継続することで、本研究課題についての研究進展が図れると考えた。

２．研究の目的

本研究課題の当初の目的は次の４点である。

(１)國學院大學折口博士記念古代研究所に所蔵されている大正10年から昭和28年にわたる折口信夫による民俗写真コレクション約2,700 点、昭和 26 年から昭和 62 年にわたる坪井洋文撮影の民俗写真約 36,000 点について、デジタル化ならびに撮影地や写真の主題・内容などの分析を行いながら研究資料として整理すること。

(２)上記の研究作業を進めながら折口と坪井による民俗写真（民俗画像資料）のデータベース化について、その形式と内容、画像資料に対するメタ・データのあり方を検討しながら策定すること。

(３)坪井・折口の民俗画像資料を用い、こうした資料の研究活用に関する方法論の検討を、写されている民俗画像資料の現地調査を行いながら進め、民俗画像の研究資料としての有効性を検証すること。

(４)(１)から(３)の研究活動に大学院生などを参加させることで、民俗画像資料を扱うことができる若手研究者の養成を行うこと。

３．研究の方法

本研究課題の目的を達成するための方法としては、研究期間中に次の７つを並行してとった。

(１)折口信夫による民俗写真コレクション、坪井洋文撮影の民俗写真は、紙焼きあるいはネガとして存在するが、いずれも劣化が進行しているため、デジタル化を行って研究資料としての汎用性を高める方法をとった。スキャニングについては、大判のネガ、劣化の激しいネガについては業者委託をし、これ以外については専用スキャナーを購入してデジタル化を行った。

(２)研究で用いている折口・坪井による民俗写真は、ネガ類などの劣化が進行しているため、デジタル化と並行してフィルムのクリーニングなどを行い、専用のフィルム保管庫での保管など保存措置を施した。

(３)フィルムのデジタル化とともに民俗画像資料の目録としてデータベース化を進めた。１コマごとに必要情報を確認し、画像に関するメタ・データの与え方を検討しながらデータベースを作成する方法をとった。

(４)民俗画像資料の研究活用に関する方法論の確立のため、折口・坪井の民俗写真をモデルに、その写真の撮影地で現状との対比調査を行った。折口・坪井の写真を持って撮影された現地に行き、現状との対比を行ったり、写されている内容について、現地での聞き書きを行ったりして情報収集を行った。これは沖縄県、鹿児島県、佐賀県、岡山県、新潟県、東京都（伊豆諸島）で行い、この研究方法によって、民俗画像資料の研究資料としての有効性を検証した。

(５)民俗画像資料が従来の研究でどのように使われてきたのかを明らかにするため、明治期以降に発刊された学術雑誌のうち、民俗学系の『人類学雑誌』『民族』『民族と歴史』『旅と伝説』などに掲載されている画像資料のデータベース化を行った。

(６)研究の進展や調査等によって得ることができた新しい知見や諸問題を共有、検討するために民俗画像資料研究会を公開で開催するとともに、研究成果の公開を目的に、折口・坪井による民俗画像資料の展示会を国内４ヶ所で開催した。また、民俗画像資料研究会では、専門的知識の提供をうけるために外部研究者を招聘する方法もとった。

(７)若手研究者の養成のため、上記(１)～(６)に國學院大學大学院文学研究科の大学院生を参画させ、画像資料の研究に基づく論文執筆あるいは画像処理、データベースの作成などに従事させた。

４．研究成果

本研究課題は期間中に次の成果をあげることができた。

(１)折口・坪井博士民俗画像資料のデジタル化については、本研究課題の期間中に新たにネガ所在が判明した折口写真 1,850 コマ、坪井写真については 14,600 コマが完了し、これによって研究資料としての汎用性を高め、公開に向けての電子データ化ができた。この成果は、劣化が進みつつあるこれらの民俗画像資料について、現時点での複製化となり、資料保全の観点からも成果があがったといえる。

(２)折口・坪井博士民俗画像資料のデータベース化については、折口写真については現地調査の成果などにより、沖縄写真について新しい知見を得ることができ、その目録化・データベース化が進展し、本研究組織外でも沖縄研究に活用され、成果があった。

坪井写真については、坪井作成の写真アルバムならびにネガホルダー単位でのデータベース化が完了した。関連の調査ノートや資料についても、全資料中の８割が整理できた。坪井写真については、『季刊東北学』第 18 号で坪井洋文の学術研究についての特集が組まれ、活用・紹介されるなどの成果があった。

（３）折口・坪井民俗画像資料についての、現地での現状との対比調査の成果は、沖縄では折口博士にかかる民俗写真について、新たに撮影地が判明し、後述の「５．主な発表論文等」の〔その他〕④にあげた那覇市での展示会で公開し、那覇市・南城市・大宜味村で利用されるなどの成果があった。

鹿児島県、佐賀県、岡山県、新潟県、東京都（伊豆諸島）での坪井博士民俗画像資料の現状との対比調査では、坪井博士撮影時以降の地域変貌が視覚的に明らかになるとともに、こうした画像資料を用いることで民俗調査が円滑に進み、かつ、地域の民俗誌作成に有効であることが検証できた。これらの成果については、後述の「５．主な発表論文等」の〔雑誌論文〕⑥⑦、〔学会発表〕①、〔図書〕①②、ならびに〔その他〕①②③で公開した。

（４）学術雑誌での画像資料利用のデータベース化によって、従来には明確になっていなかった画像資料の研究活用について、学術史上の推移が判明し、新たな知見を得ることができた。

（５）若手研究者の養成については、上記（１）の実務によってフィルムのスキャニングの技術を向上させ、（２）の実務によって、民俗画像資料のデータベース化にかかる諸問題を発見させ、作成法を修得させることができた。坪井博士の民俗画像資料のデータベースは、「５．主な発表論文等」の〔図書〕②に収録し、公開したことも成果である。

さらに「５．主な発表論文等」の〔雑誌論文〕②④は、本研究課題で科研研究員に採用した若手研究者の研究成果である。

本研究課題の期間中の主な研究成果は以上の通りである。今回は民俗学の観点から画像資料の情報化と研究活用に関する研究を行ったが、こうした成果からは、地域の文化や景観などを撮影した近代以降の画像資料は、民俗学を超えてさまざまな地域研究に有益な資料であることが明らかになり、この研究を起点に人文学における新たな資料論が展開できる。

「５．主な発表論文等」の〔その他〕にあげた①～④の展示会では、合計で 2000 名を超える見学者があり、また、これらの展示会は「岐阜新聞」「琉球新報」「沖縄タイムス」などでも取り上げられ、広く研究の重要性が周知されたことも特筆できる。

今後の展望としては、本研究課題を持続させ、また、平成 19 年度に民俗画像資料についての共同研究会を行った岩手県立博物館など、各地の画像資料所蔵機関との研究協力・研究連携を進めることである。さらに、研究成果をもとにした民俗画像資料アーカイブを公開し、国際的にも利用し得る態勢整備も今後の課題となる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計７件）

①小川直之、折口信夫の花祭り写真、折口博士記念古代研究所紀要、第９輯、１－72 頁、2006 年、査読有

②河野光沙、「ひょうたん鯰」絵の位相、伝承文化研究、第５号、17－38 頁、2006 年、査読有

③小川直之、民俗芸術写真と民俗研究、折口博士記念古代研究所紀要、第 10 輯、１－70 頁、2007 年、査読有

④服部比呂美、絵雑誌に見る民俗倫理観－『子供之友』甲子上太郎を事例に－、伝承文化研究、第６号、15－74 頁、2007 年、査読有

⑤小川直之、画像資料研究の課題、國學院大學日本文化研究所紀要、第 100 号、141－168 頁、2008 年、査読有

⑥須永敬、民俗画像資料の可能性－坪井洋文の大隅半島大浦調査写真から－、折口博士記念古代研究所紀要、第 11 輯、25－54 頁、2009 年、査読有

⑦藤井弘章、民俗写真の撮影と利用－北部伊豆諸島における坪井洋文の試み－、折口博士記念古代研究所紀要、第 11 輯、55－86 頁、2008 年、査読有

〔学会発表〕（計１件）

①須永敬、民俗画像資料の可能性－坪井洋文の大隅半島調査写真から－、第 36 回東海民俗研究発表大会、2006 年

〔図書〕（計２件）

①小川直之・長野隆之・須永敬・藤井弘章、島のくらし 50 年の変化－坪井洋文撮影民俗写真から－、全 20 頁、2008 年

②小川直之・長野隆之・須永敬・藤井弘章、画像資料と民俗研究、全 136 頁、2009 年

〔その他〕

〔民俗画像資料の展示（研究成果の公開）〕

①「島のくらし 50 年の変化－坪井洋文撮影民俗写真から－」展、東京都渋谷区・國學院大學、2008 年７月 18 日～７月 22 日

②「島のくらし 50 年の変化－坪井洋文撮影民俗写真から－」展、岐阜県岐阜市・岐阜市生涯学習センター・ハートフルスクエアーQ、2008 年９月 21 日～10 月３日

③「島のくらし 50 年の変化－坪井洋文撮影民俗写真から－」展、大阪府東大阪市・近畿大学、2008 年 10 月 22 日～10 月 24 日

④「釈迢空・折口信夫と沖縄」展、沖縄県那覇市・沖縄県立博物館・美術館、2008 年 12 月９日～12 月 14 日

〔ホームページ〕

http://www2.kokugakuin.ac.jp/~ogawana/kaken.html

６．研究組織
(1)研究代表者
小川　直之（OGAWA　NAOYUKI）
國學院大學・文学部・教授
研究者番号：30265954

(2)研究分担者
長野　隆之（NAGANO　TAKAYUKI）
國學院大學・文学部・准教授
研究者番号：00407165
須永　敬（SUNAGA　TAKASHI）
岐阜市立女子短期大学・国際文化学科・准教授
研究者番号:90390004[期間:2006-2007 年度]
藤井　弘章（FUJII　HIROAKI）
近畿大学・文芸学部・講師
研究者番号:00365511[期間:2006-2007 年度]

(3)連携研究者
須永　敬（SUNAGA　TAKASHI）
岐阜市立女子短期大学・国際文化学科・准教授
研究者番号：90390004[期間:2008 年度]
藤井　弘章（FUJII　HIROAKI）
近畿大学・文芸学部・講師
研究者番号：00365511[期間:2008 年度]